

913.5

ソ

初

烈

園

西

卷

満壽
所藏

園の花物挿し序
心算友家へ申す
女は桐子の意を深き歌に
こゝに僕風雅なる金糸字書
家愚俗に不討借儀乞ふ
身隠一日友家へ偶作



Handwritten notes and signatures in cursive script, including a signature that appears to be '満壽' (Manshu).

の小亭に食客とるりまきり其意中
 旬を過つて澤山満る春水と夏日奇
 峯城跡えつていさうとて思を消殺せ
 りと春の日記を戯作の合也此の彩
 葉子に花したる意の白玉とまりのあふた
 連玉堂のたけえられ小冊とてあふよ

補綴くく外野を憲けたつて半あ
 空をよ候そえて束るまあ色くあふ
 勝の標はまお園がうらうらと花をさうり
 久しと自列の美談をまらけくまあ
 あふよとてめでた記まあ泳とせん
 應して筆を操れとて稿を肯とあふ

たるまに功拙もに平こうせつ 心こころを任まかせしむるを
 雑まじ成なりはぬまにたつるを補おぎなひ見みぬるを重おもく
 のこころ散ちりり備そなへ新あらた奇きといふまにたつるを
 折おり也なりと見みる老ちやうのこころ花はなと海うみのこころつらなるを
 のこころ様さま言こと我われをわげらるるも重おもく我われ家けはたく
 泉いづみのこころ築つきの山やま堅かたく日ひ景けい色しきを幕まくあまふて

次つぎ第だい小こやらるる四季しきはたく夏あつと秋あきを
 嫌きらひあらず賞あほう教くわうあらんとを願ねがふこと
 ちやん

于時天保乙巳中夏稿成

金龍山人狂訓亭

為永春水誌



三世の奇縁

二世のやくそく

百折言ひもかた言ふが
千磨の憂甚とて

松の操も知らずんば

笠松家の



猶覚て世同中の夢
如の



半七男の家
笠松



在^ま五^ご中^{ちゆう}將^{しやう}の
 豊^{とよ}大^{だい}夫^{ふう}の
 尊^{そん}柳^{りゆう}史^し衣^い
 君^{きみ}の^か



半^{はん}七^{しち}他^た家^けの^か繼^{ついで}を
 於^お園^のと^と同^{どう}宛^{えん}の
 契^{せき}の^の結^{むす}を
 柳^{りゆう}楚^そ少^{しょう}の
 吳^ご小^{せう}松^{しょう}氏^し
 德^{とく}を^を言^いは^はれ^るを
 美^み婦^ふの
 富^{とみ}を^を言^いは^はれ^るを
 孝^{かう}子^しと^とあ^らん
 光^{ひかり}中^{ちゆう}將^{しやう}の^の美^み男^{おとこ}

蝶乃

良

身ノ

子ヤ

花ノ記



貞烈美談園の花初編一の巻

東京 狂訓亭主人補綴

第一章

武士の賞喰く立ふけり。と云ふ事ぞ文武の吟
今ハ昔の事をありけん鎌倉佐々木谷の屋補
と揚り食禄二千石を願ふと豊谷半七事
者ありけり竹屋お仲と惚る事
ひく算とあり娘をぬめりや家内

治ありて上下和順ありけるは、治ありて 此の半をまゝ半
 歳の節、歳 内室お仲、内室お仲 姓身一とあり、姓身一とあり 此の半
 をまゝ酒死ありけり、酒死ありけり 算年者、算年者 家督を継
 半をまゝ亡後、亡後 お仲の男子、お仲の男子 出生、出生 何れも、何れも 名を半
 と名づけお仲の祐、お仲の祐 嫁とありて、嫁とありて 法名を真心と
 改め、改め 佛の道、佛の道 お志を、お志を 添く、添く 欲は、欲は 子供の成人を
 祈る、祈る しかく、しかく 月、月 矢も、矢も も早く、も早く 半を清く、半を清く
 よの中、よの中 お女の子と、お女の子と 繼け、繼け 家母の、家母の 養育、養育 あり、あり

あり、あり 半七、半七 女十七、女十七 の、の 藝、藝 七、七 之、之 も、も 解、解 盤、盤 の、の 九
 類、類 人、人 業、業 半七、半七 爲、爲 せ、せ 九、九 後、後 室、室 眞、眞 心、心 の、の 悦、悦 び、び あり、あり かな
 なく、なく 樂、樂 し、し 三、三 百、百 七、七 之、之 け、け なら、なら 女、女 時、時 用、用 人、人 十、十 年、年 眞、眞 心、心
 の、の 社、社 屋、屋 機、機 操、操 を、を 傾、傾 四、四 方、方 の、の 味、味 の、の 法、法 あり、あり
 何、何 の、の 守、守 たり、たり 半七、半七 の、の 七、七 之、之 必、必 一、一 百、百 自、自 慢、慢 の、の 志、志 義、義
 あり、あり 十、十 五、五 半七、半七 之、之 も、も 能、能 殿、殿 たり、たり お、お 威、威 あり、あり あり、あり
 たり、たり 半七、半七 之、之 早く、早く 空、空 所、所 御、御 事、事 子、子 比、比 多、多 爲、爲 人、人 振、振 あり、あり
 した、した 半七、半七 の、の 事、事 十二、十二 半七、半七 之、之 早く、早く あり、あり 十、十 五、五 年、年 眞、眞 心、心

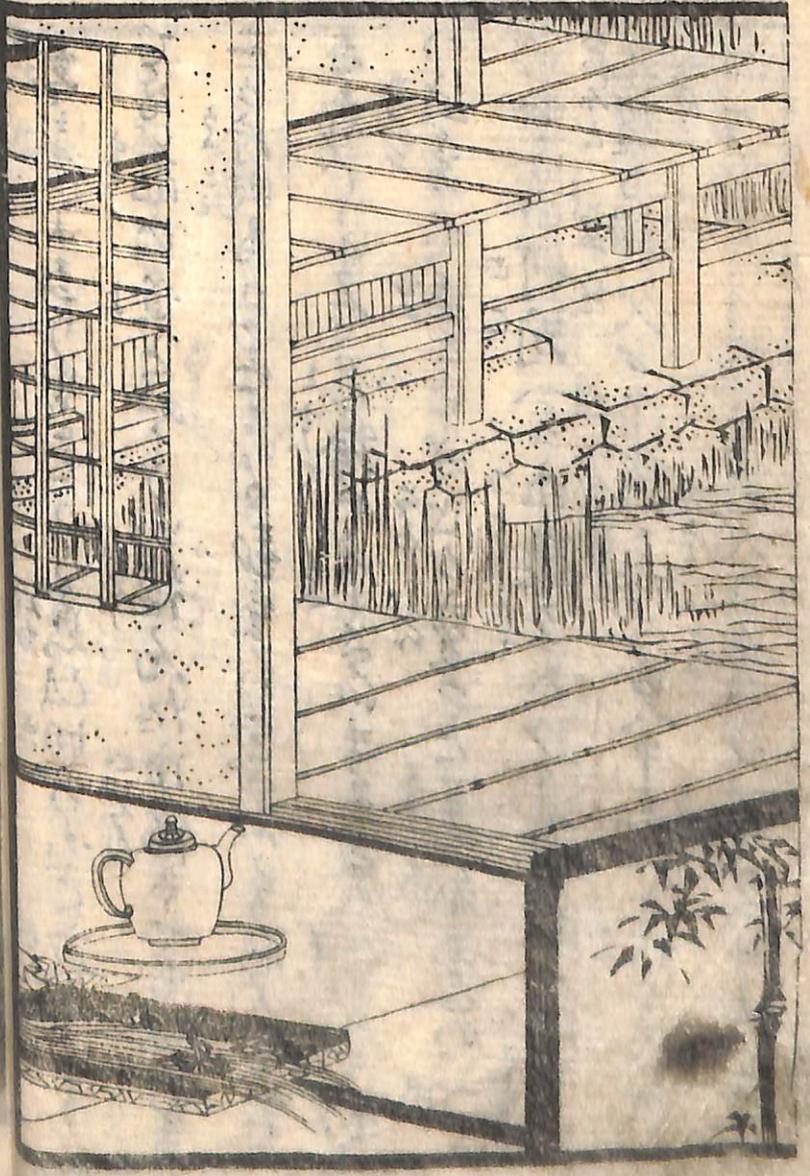
ての工と廿 十 一 先 先殿 さむの 先殿 さむの のれ送 まも 送 まも も ご ござりま
 走除 あなま りお案 うい がかさあると か 心 こころ せいの ま 出来 でき ます
 その何 なん 方の かた 流 なが 母 はは 堂 どう も と 急 いそ 角 かく の ひ ひ ま まで も お側 そば へ
 お あ 進 すす る ま へ ご ころ の ぐ 一 同 どう で か 随 ま 分 ぶん 出 い 最 さい で ご ぶ ん
 ます ご ぐ れ 既 い 分 ぶん だ か と あ ぬ い へ も 早 はや の が 官 くわん 一 ご 一 ご
 ござ ご の ま ませ 一 私 わが も た 後 のち の 思 思 おも へ け けれ と 養 やう 父 ふ の ま せ
 ん も ぞ り 秘 ひ 母 ぼ 一 第 一 ずい 潜 ひそ 執 しやく 事 じ も お 不 ふ つ る 高 たか 放 はな
 マ ア 何 なに う を よ く 覺 かく さ せ ぐ う 人 ひと で 十 一 工 工 こう 事 じ と ご ころ を

モ お 素 もと 本 もと 流 なが ぐ ひ る さ れ ま せ る 生 せい 海 かい の れ 登 のぼ 出 で ぬ か 秘 ひ
 言 こと ごと よ ち か へ ま ごと ご の ま せ ぬ け が 只 ただ お 案 案 あん ト や ん の 除 のぞ り
 男 おとこ が よ せ を ぞ く かり せ る さ る く 女 め の 惚 惚 おぼ る の 始 はじめ 終 しま
 お 身 身 み の 邪 邪 よこしま 産 う ね も ぐ ね ば よ の と 存 ぞん ト ま せ
 ト は ね の 折 おり ぐ 腰 腰 こし 元 もと 三 三 勝 しょう 一 片 入 い 陽 やう 控 くわう せ
 せ せ ト の 自 みづか 自 みづか 志 し 志 し ち と 後 のち 室 むろ 入 い る か めて 究 究 きう 未 み 成 じやう 夫 ふ
 を あ 合 あ へ 一 親 おや 子 こ と い へ て の ご 一 ま せ が 十 じゅう 車 しや に
 その ま 浸 ひ じ や 自 みづか 自 みづか 母 ぼ 似 に 似 に 容 よう 儀 ぎ が よ 一 ト 男

きそハツと三勝が顔に紅葉あけ夕映やうき
とまをゆくさう伏向親いらまうき男のをほ
十イエモウ形むくり成人ありあてりけぬ
せんぞあをよりあう水教訓を預ひまは
鴻田の女子でけ極ふまはけら穢るごごふ
むをわうよん響をこころして十年よ安堵さ
せたぬ。ドレちよろと陽に入ませうイヤ十平
をへて居るよト立上る 十イ有がうふなト

また私も旦那さ由のゆきけんを伺ひませうト
同トくおなを立上る係を残りて三勝の後室の
着習の小袖と巨燧（掛其辺を片寄居所）
半七八杜若をむにりうて庭よりより（母人
さん）イイ只今お陽へお入すさううう
志の苑でござのまは子（これハ其方の誰名と
何でござんす）杜若といふことヨ（中身
の工をござのまはる）其方の半は舟の板と

貞婦 孝子 節婦 生



あまに 世あそびを私がかねんかひして
あま君の内出世あそびを私がかねんかひして
あせん 若其振る相様かごごのまし
くあひあつものるまきくばあしあそび
それトヤア早く何所ぞ之様てあまといふ
のうへにエさうてあごのあせんあま君が内出
にいつツあつると私ハ髪をおろして尼女あり
あまト思ひはあつる涙の目元娘公の印とすぢ
に涙も見えくあれありはせハ三勝が持つ

をさまりあぐく 一とくそれを苦勞にあま
いがり。娘の在宅へのま子あつる日継あ
振あ所一処ても其方と引取とを養父あ
あつてそれを不美知あつ何不様家で
もま子あつるあひく安あつあひかよあ
たがた振あつりめして下さあまにあつ私
死でもようごごのあまを分まご外ああ
あまにあつごごのあまを分まご外ああ
あまにあつごごのあまを分まご外ああ

それにも^{あつ}いふ^かが^{あつ}た^{あつ}数^{あつ}の^{あつ}掾^{あつ}側^{あつ}を^{あつ}浦^{あつ}波^{あつ}に^{あつ}
二^{あつ}と^{あつ}何^{あつ}ら^{あつ}に^{あつ}成^{あつ}て^{あつ}は^{あつ}る^{あつ}人^{あつ}上^{あつ}の^{あつ}心^{あつ}を^{あつ}持^{あつ}た^{あつ}
時^{あつ}私^{あつ}が^{あつ}参^{あつ}る^{あつ}と^{あつ}私^{あつ}の^{あつ}心^{あつ}を^{あつ}復^{あつ}た^{あつ}て^{あつ}し^{あつ}て^{あつ}候^{あつ}
事^{あつ}に^{あつ}遊^{あつ}ん^{あつ}だ^{あつ}と^{あつ}い^{あつ}ふ^{あつ}が^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
君^{あつ}が^{あつ}あ^{あつ}の^{あつ}子^{あつ}と^{あつ}差^{あつ}別^{あつ}れ^{あつ}る^{あつ}に^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
と^{あつ}い^{あつ}ふ^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
眼^{あつ}も^{あつ}持^{あつ}つ^{あつ}て^{あつ}押^{あつ}さ^{あつ}す^{あつ}色^{あつ}を^{あつ}念^{あつ}に^{あつ}て^{あつ}候^{あつ}に^{あつ}
春^{あつ}の花^{あつ}は^{あつ}は^{あつ}開^{あつ}き^{あつ}の^{あつ}柳^{あつ}の^{あつ}風^{あつ}俗^{あつ}も^{あつ}露^{あつ}け^{あつ}り^{あつ}

そ^{あつ}の^{あつ}心^{あつ}を^{あつ}持^{あつ}つ^{あつ}て^{あつ}候^{あつ}に^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
の^{あつ}心^{あつ}も^{あつ}同^{あつ}じ^{あつ}に^{あつ}候^{あつ}に^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
簡^{あつ}井^{あつ}簡^{あつ}ら^{あつ}に^{あつ}て^{あつ}候^{あつ}に^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
し^{あつ}隔^{あつ}た^{あつ}り^{あつ}主^{あつ}と^{あつ}家^{あつ}來^{あつ}の^{あつ}角^{あつ}を^{あつ}念^{あつ}に^{あつ}て^{あつ}候^{あつ}に^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
と^{あつ}候^{あつ}に^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
も^{あつ}あ^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
ん^{あつ}と^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}
る^{あつ}の^{あつ}心^{あつ}を^{あつ}持^{あつ}つ^{あつ}て^{あつ}候^{あつ}に^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}は^{あつ}ら^{あつ}

中よ蜂が居るまでとさうさうそれて笑せ
ぬこのご登ごと思ふまゝ浦次のまじりか
まご大方その二階があるたふたふ惚れら
かごふ仕振がなほお見替る女があるのう
寄られて嬉しくもなみれごるまき書り
美しうくを思ふべし折岸浦次が鳴次声
浦七さあしくとりられてびらり二人を飛退
平るんど一旦那さるがあらうとをな入ましと

平行くころ三勝この花を母にさんお上て
ト云捨て奥へ行跡お浦次と三勝の部屋
内へ行寄るが三勝さんおま今の内
どお結る三私にマア内用をやり上て
ませうヨその花の内用之私かた振り
うう早くお結るそと今日ハ昼をさわ
客があることとさううのヨ
かか結るなりとよあまのす七さあ

嗚も存祈よせらまじと業と煩ふ親の
悪よき相命と三揚のまどは久
まゝなるおま業滅おお嫉しうぞんじまは思
ハ死でも日なれませぬその由おあまの
何ありともいふがよふ時てやらうとやらう
ふ情も深き真心の云業は膝をまらぬ
あどわきまをねがひけり

第二章

彼三勝の志もぐと預へば後室心と察して
かひのさうお娘公の一筋ゆゑ今も誓の出来
扱ふ業といふあつる堪忍しやまど保がらぬ
ハ否で通して居やうもようらふ被令親父が何
とらふてもけ真心が精合不とお多きまきま
おのりなるヨハイ有雅ふ存じまはそのお業
といふまきまして胸のほろろ下まゝにや
志の正身傍をたくりやうそお火の情

き
系あつ死ませんト火入を採てまゝにこれより
方々真心の不便とてつけてらるは何れもま
ま秋と三ツウ重ねて今もたや半七の衆十九才
た三人男であればこそ七雅九厄とまあるは初言
さでかくへ死歎と母の安帯ト小随ひて大所河原の
此縁日兼て其日と結けり跡生の空に呆ら
小連ハ出入の草沢園中々野乾筒とよなる箱
田安幸光る頭と振立く一サテ若旦那早
とやううませう何不永日でも路が遠いさ
サア〜モモ衆さん衣類とをやく野にませんと
衆三つさゆ人とするこれハ
三つが梅我ハ必うあるは
さる私ハ梅我さんとくやません
おまへねあまふ梅衆飲ひがれごらあつ似るので
あつと旦那のお迷ひるごらも無理あるとせける
三存トませんヨ
おまへをこれより衣類ととりいづてまよふ
きくえさせいらく衆をつけて
おまへをこれよりいづてまよふ
おまへをこれよりいづてまよふ

とやううませう何不永日でも路が遠いさ
サア〜モモ衆さん衣類とをやく野にませんと
衆三つさゆ人とするこれハ
三つが梅我ハ必うあるは
さる私ハ梅我さんとくやません
おまへねあまふ梅衆飲ひがれごらあつ似るので
あつと旦那のお迷ひるごらも無理あるとせける
三存トませんヨ
おまへをこれより衣類ととりいづてまよふ
きくえさせいらく衆をつけて
おまへをこれよりいづてまよふ
おまへをこれよりいづてまよふ

東イ 兄さまおひさま乞ハ提をうましヨ 一葉おく
イヤア三橋さんの用心配をうまし惚ハ性根イヨ
うまのと尸を先お支度より一是より
手首く幕の引返ハ浪の音あてはわき
道具うらて品川の場場主と美少年の
道行とらふと若旦那がお寺の小姓の扱ごモ
ちトちうの字う子 一それららんまさん胸り多
辨だうさうりふ禁句をオホミ 一イヤア大和

屋ア引一まご其扱正を 一トキニおま人も十九の厄
とこのおせう 一お代参でお守と 一イヤア又へも
預ひませんいさいて来てをらふと名作おまら
ありまに 一ホイまごあくありあひそはくしご子
トこの内半七八奥へいとまを 一七五ある安業
ハおふ立業平といふ奴を供を出うける二膳ハ
半七を呼ぶめ何う啣くるうのよさ安業をま
のどり 一イヤア床をなれでるの出版のりら



事モシ今夜ハ品川泊で明日ハ日輪さぬが暮
金色羊七さぬハ愚僧の扇ふかろうと雲月が
ふらり〜
モシ三勝さんようございませう
とも思召次第私ハ存トせんそ代り由後室
さゆハ告ませ安イヤアそれハ大變く若旦那
が上らふと仕作てもけ坊主が由縁云や上と無理
引てくるが和尙の寸志さんと頼母ハ一方丈
さゆでござんせんくゝるア下おそのく〜とりひ

あつらひ由元素と縁工イヤア本意ハおた後ごけ
品川ハホイゑんごつけヲそれく若旦那ハモウ
先へお出なさいませ安イヤアそれハ大變出〜抜
まてゝる残念な遠くハゆゝまゝの海退くけてませう
おやト身振こゝろろ物さ〜めおや〜とあ〜い
て走り行かて大師へ来け〜途中の酒飲
らん〜さ〜くあそび〜や〜て我家〜場〜
人づれの路草子芳きと〜ま〜え〜元氣〜よく安

澤山さわさんあがらうらうらうけけん振るものりけけんまけんま
サけんお酌けんをいりませうけん「イヤけんくけんまけん且那けんのけん
おけんと待けんませうイヤけん晴けんふけん三勝けんさんけん今けん度けん高けん輪けんの
茶けん屋けんでけんありけんろけんのけんとけんありけんまけん「おけんいけんんけんと
かけんいけんのけんまけん「けん若けん且けん那けんをけんせけんめてけん麻けん物けんをけんらけんか
おけんいけんるけんせけんんけん「けんいけんんけんてけん其けん振けんるけんウけんガけん出けん来けんまけん尺けんも
のけん飲けん「けんそれけんでもけん若けん且けん那けんがけんおけんまけんのけんとけんとけんあけんまけんまけん
おけんれけんがけん本けん業けんとけんとけんおけん作けんまけん「けんいけんヨけん契けんさけんめけんくけんり

「けんアけんレけんまけん「けんそんなけんとけんとけんをけんてけんおけんまけんまけん「けんおけん成けんてけん六けん本けんでけんと
さけんいけんのけんまけんまけん「けんトけん是けんがけんおけん下けんめけんのけんかけんうけんのけん中けんでけんあけんらけんくけん時刻けん
とけんうけん「けん半けん七けんもけん来けんりけんてけん酒けんおけんとけんありけん徳けんもけんあけんけ
「けんまけん「けん安けん幸けんもけんいけんとけんまけんをけん告けんてけん立けんくけん「けん酒けんふけん二けん入けんも
さけん「けん向けんのけん「けんコけんウけん三けん勝けん母けんさんけんのけん方けんのけん面けん用けんいけんまけんいけんら
姓けんでけん来けんれけんばけんいけん「けんたけん「けん今けんまけんのけんりけんまけん「けんたけんらけんおけんれけんがけんあけんい
いけん「けんうけん「けん半けん七けんのけん方けんのけん用けんとけんたけんせけんとけんはけん作けんまけん「けん酒けんふけん二けん入けんも
もけん井けんいけんもけん市けん夜けんのけん内けん後けん室けんさけん由けん半けん五けん石けんのおけん仕けん入けん合けんでけんさけん

いまれりや〜の扱あつかでござるもまき由縁よしゆりの扱あつかが
ませそ〜と申まを字あざにい入いり申まをでござるもまき
被よ扱あつかびるんぞ申まをお出いせまをまきあつかるあつかお申まをでも
あると申まをまきあつかの申まを一い評あつか判あつかがあつか目あつかくあつかと申まを申まを字あざに
り〜ひてあつかござるやアあつか控あつかりあつかとあつかりあつかのあつかござる〜とあつかりあつかのあつかことと
編あつか入あつかの〜別あつか宅あつかあてあつかめあつかをあつか申まを房あつか小あつかまあつかきあつかれあつかばあつか外あつか
申まをまきあつか〜もあつか申まをあ〜とあつかいあつかのあつかござる何あつかとあつか実あつか下あつかやあつかあるあつかま
歎あつか一あつか涙あつか小あつかかあつかれあつかああつかうあつかひあつかおあつか申まをまあつかきあつか何あつか不あつか私あつかがあつかれ

あ〜と申まをてあつか申まを入いりあつかさあつかるあつかやあつか親あつか遠あつかのあつか心あつかをあつか〜とあつか水あつかの
泡あつかふ〜とあつかマあつかアあつか私あつかがあつかそれあつかをあつか宜あつかとあつか申まをてあつか居あつかれあつかまあつかきあつか
とあつか申まをてもあつかおあつか別あつかれあつか小あつかまあつかきあつか〜とあつか死あつかぬあつかとあつか覺あつか期あつか〜とあつか未あつか
来あつかとあつか頼あつかむあつかまあつかきあつかるあつかいあつかおあつか察あつか〜とあつかああつかまあつからあつかてあつか申まを
申まを〜とあつか無あつか理あつかとあつか申まをたあつからあつかまあつかきあつかかあつかけあつか〜とあつかかあつかたあつかああつかまあつかせあつからあつか所あつか
堪あつか忍あつか悔あつかげあつか〜とあつか下あつか涙あつかとあつか申まを申まをてあつか〜とあつか申まをとあつか申まをとあつか
せあつかああつかてあつか〜とあつか申まをれあつかありあつか〜とあつか申まをんあつかのあつかマあつかアあつか今あつかのあつかことあつかやあつかあるあつか
申まをの〜とあつかそれをあつか苦あつか勞あつか小あつかまあつからあつか〜とあつか申まをるあつか〜とあつか申まをるあつか〜とあつか申まをるあつか〜とあつか申まをるあつか

半信子に由らむのと云へし悪くらふが身りちを
まろくして世真ひ人の秘入やう中まろくしつとや
秘入其秘入漁びとらひるマア酒でものをさそ
てモウみんるが癖と秘入さうたれも来らぬ秘入
ハイありがご存トまも下涙をぬぐひあき
いた秘思召ても若ねもまろく云ふ身小あきりな
されしう内後室さあひどの秘入お秘入あそびまそ
さびいませうごまもた秘入りません私ハ尼小秘入

ままそらう参入君ハ内世あそびませへ感心し
てまへおけんゆまと死
か出あるののろト脊をさで他目もあられを對
膳あて食すも済ま床も延々一た秘入るま
林とあそびませへまも今夜ハと寝る
三それでも秘入る
林過しままといけません
ハテ野暮ららぬ母人さんも中兼知のハ悪縁
何の遠慮ぐり方ののろそれとも否らう海方が秘入

アレまゝそんまをを法仰まを何の勿解や
香のあんのとりか振るこを愛め思われませう
秋洋せんあゝ来やト引寄る屏風の画の中も
恋の山栂のちりけつりて高くもるん浮
名の癖癖立まへたる六枚のさもむりまゝ
てうはぐひを多き取中とんえふける

貞烈美談園の花初編 一の巻下

貞烈美談園の花初編 二の巻

東京 狂訓亭主人補綴

第三章

彼三勝ハ半七の身と立親ハ安心させ者事せむ
拓ウチ不凍ゆくかさまを發明の生信あるゆ名想ち心
どあゝこめて習者古ふ通ふ其外ハ他所ウチも仍ウチ性
を居る其行状のこれせとらうて習りウチ者
お母のよろこびりんくあく所居る珠敷のさ

たのふ他人^{いと}あはれ^{なり}を素^{さの}いと三^{まん}勝^{かつ}どち^ちく^く招^ま
頂^{たか}三^{さん}勝^{かつ}あはれ^れをり^りふと思^{おも}つて居^ゐる人^{ひと}目^め
あま^まバ^ば扱^あて居^ゐる外^{ほか}の^のとでも^もる^るの^のい^いむ^むど^ど半^{はん}七^{しち}の^の
行^ま義^ぎ目^めあ^あ立^た不^ふと^との^の慎^{しん}と^と不^ふ残^{ざん}其^{その}方^{かた}の^の心^{こころ}
実^{まこと}不^ふ婚^{こん}の^のそ^そり^りを^をう^うひ^ひ其^{その}代^{しろ}り^りあ^あ其^{その}方^{かた}の^の心^{こころ}の上^{うへ}
い^いは^は真^{まこと}心^{こころ}が^が成^{なり}あ^あり^りえ^えて^て世^よを^をま^まる^る程^{ほど}ふ^ふあ^ある^る心^{こころ}
案^{あん}ト^トや^やる^る私^{わたし}を^を母^{はは}と^と思^{おも}つて^て居^ゐる^るヨ^ヨ一^{いち}存^{ぞん}ト^トが^がけ^ける^る其^{その}
仰^{おんが}半^{はん}七^{しち}ま^まの^のお^おと^とる^るさ^さう^うあ^ある^るせ^せら^らま^まし^しと^とを^を

合^あ堂^{どう}の^の内^{うち}若^{わか}者^{もの}若^{わか}と^とあ^あま^ま扱^あつて^てあ^あの^の心^{こころ}を^を元^{もと}来^{きた}成^{なり}
孝^{こう}行^{こう}の^の心^{こころ}生^{なま}實^{じつ}私^{わたし}風^{ふう}情^{じやう}の^のゆ^ゆゑ^ゑで^であ^ある^るお^おも^もせ^せん^ん一^{いち}切^き
か^かく^くま^まふ^ふお^おの^のま^まを^を私^{わたし}の^のい^いり^りく^く知^しつて^て居^ゐる^る先^{せん}目^め
半^{はん}七^{しち}が^が大^{だい}師^しま^まあ^あら^ら泰^{たい}つて^て帰^{かへ}る^ると^と晚^{たん}用^{よう}が^があ^ある^ると^と半^{はん}七^{しち}
の^の部^へ屋^やを^を行^いく^くを^を遠^{えん}入^{にゅう}と^とま^まる^ると^とひ^ひそ^そく^く声^{こゑ}雅^{みやび}が^が今^{いま}
ご^ごろ^ろの^の心^{こころ}を^をま^まる^るか^かと^と隔^{くわ}る^るの^の透^とり^り取^とり^りて^てな^なれ^れ其^{その}方^{かた}
が^が異^い見^{けん}の^の涙^{なみだ}声^{こゑ}始^{はじめ}終^{はつ}と^と不^ふ残^{ざん}ま^まし^しと^と一^{いち}切^きた^たれ^れあ^ある^る
あ^あの^の耐^たえ^えと^と息^{いき}を^を赤^{あか}ら^らめ^めさ^さう^うら^らむ^むく^く一^{いち}切^きの^の心^{こころ}が^が

言ひも親の慈悲とす三腸の程ゆゑ涙のたれ
まろり〜がまろ〜ふ白を上におまきると親の眼を
めてこれをて勿辨るのぢり〜提びて〜ま〜か
細〜の〜ま〜半さるの厚のお信平〜次の中縁
やら世自ふ今日ハ縁増て下り〜けて涙おむせる
るの〜恋の癖〜ま〜癖〜け〜と〜と憎のや
ともおまろりあ〜く〜け〜と〜もお頼むとの由意ハ〜の
胸ふ針をさすの文膽を〜あ〜されて〜

ト忍入る三腸の背と〜ま〜て真心ハ〜の其れ
涙る〜る〜の〜私が取持て〜も同前七れも半
七が不便由殊お其方も乳兄弟それの〜く〜涙ある
身今でも半七を墨子に〜て〜も相愛ゆ〜
縁付ねと遠〜く〜心お〜けて居て万事つ〜く〜限
居料の中〜く〜溜〜その金もモウ百兩〜と〜て〜お
ト〜用意の金の数小粒と〜り雜ま〜てありける
ま〜ふ小たんま〜り〜と〜三腸の〜お〜た〜この金とま

本地色の重たんまの衣類の不残せよ
かむもく悪く思ゆるまヨ
あくと存ドもまよふ
でもお遊るされて下さるま
どお過あそびを渡お尼とまり
「對」ますても縁づくるん
寄もせんたとまと表向定ま
むごの女の男を一人の外肌
まよふ

人首でも覚て居ました
女房と思つて居ると身も
仇恩のおまはるの由を
身も便りふまて嫌
ハ私ガ麻相しや慥忍心
身も便りふまて嫌
ハ私ガ麻相しや慥忍心
身も便りふまて嫌

てはさむる中知事取とて先きのことくはしむる大衆
背棄る酒をも給て氣どとさう半七も喝て来や
ト母子の中亦三勝が氷もりのさぬ酒どのあをさく
らふとけしけりあ亦用人十年はは程半七を尊養
子のいのちも死なうり中承りければ是亦其方一縁
子んと思ひ定一が娘三勝の法も知りされば生る是
と遠ざり日雲兼引あさりとと女房とも内儀しとく
親類へ約ける事期るとも三勝のあはれを養
あは

あれ何むなく後室の御屋へ来られ母の声「ヨや母人
さん内儀様ようか父耶さんいませぬ機嫌何いおあは
るまのません子今日ハ本所の伯父さんか由大に酒を
其所（おれど）よそれゆゑあはれもかといまを頼つてを養
おやう種なるかゆトまは後室亦向ひ一尊母も所
存ト七へのせられまを三勝の伯父さん一後泊りの
か腹どあやういふ事一「それい嘘心配に候ゆ
通り伯父は兼て婿もあつて明日はあはれ



まを三一三さう三狄ウそれであらう三さう三の三幼奉ウと
う三七三才三ま三を三そ三と三て三られ三た三恩三が三あ三る三の三ゆ三り三
跡三の三母三人三さん三由三由三未三知三さ三う三え三わ三く三様三が三り三引三え
ご三う三私三の三ゆ三を三さ三り三ま三せん三う三う三泊三を三ま三ま三ふ三海三の
ま三に三一三それ三の三さ三う三と三も三勝三ま三ふ三し三る三コ三ウ三く三様三お三記三
務三も三と三て三様三が三り三せ三る三ま三前三の三聲三あ三る三ら三し三と三の三後三ま三ふ
居三る三ま三う三た三引三や三く三其三様三を三ま三ま三と三お三ッ三や三る三か三う三
モ三ウ三く三私三の三春三の三ま三せん三ト三恨三め三ま三う三ふ三半三七三さ三る

平三る三ん三の三馬三麻三る三よ三ま三と三か三あ三る三の三ゆ三り三さ三う三た三ん三ご三く
引三が三り三一三引三エ三く三よ三い三ま三ま三と三ま三君三由三あ三六三命三も三と
存三ト三て三居三ま三う三ま三う三う三け三ん三う三お三る三義三理三ハ三大三て三も三随三分三
ト三う三ま三う三ご三ぶ三あ三ま三を三虚三痛三を三つ三ら三て三私三の三ま三あ三り三ま三せん
引三サ三それ三で三ら三う三ま三の三ツイ三き三う三た三ん三を三ま三ま三の三ご三様三思三い
や三一三た三振三る三ま三ま三う三ま三か三る三ま三ま三今三の三ま三ま三と
ご三思三い三て三下三さ三の三ま三あ三る三一三ナ三ラ三く三ま三前三の三ま三の三細三り
ま三う三て三居三る三十三日三六三日三泊三て三も三う三ま三う三の三ま三ま三の三ヨ三引三ん

Handwritten text in cursive style, likely a historical record or a personal account. The text is written in black ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a specific event or a collection of items. The characters are highly stylized and difficult to read without context.

Handwritten text in cursive style, continuing the narrative or list from the previous page. The text is written in black ink on aged paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a specific event or a collection of items. The characters are highly stylized and difficult to read without context.

世の中を是非をけし

第四章

さて翌日おるりければ三勝の支度と調へ半七の
前におか一た拵をうす斐君とありまは
ゆて来るな一何ぞう私に参るの否をいふまは
一其拵が世帯といはせと早くゆがひ大分立流
ふお糺が世帯の早くゆてを参るがヨリ下拵で
いふの見舞舞ゆて来るなり一斐君の其拵とある

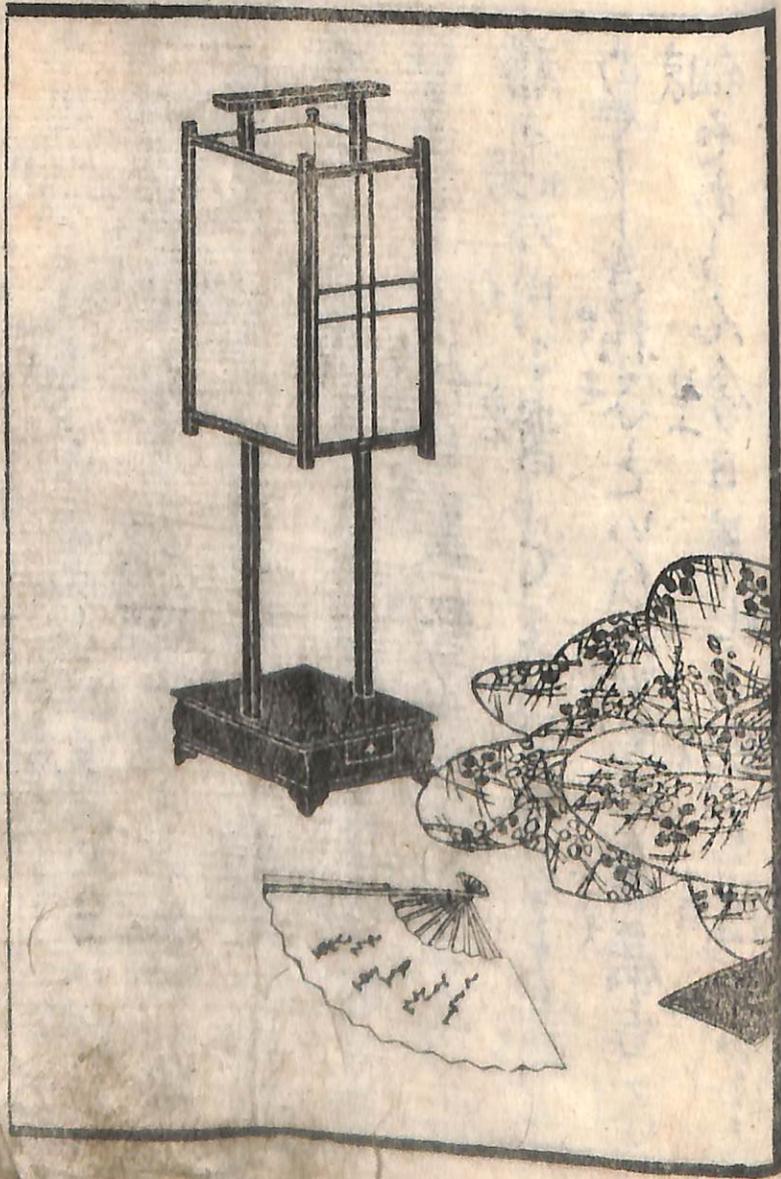
りふふも何ぞうお別れしたるがゆでござるまをト
斬留時とて一実におれも今日お参りたくるの拵で
が大病人の正とてうすまうするの程で来る一今ま
やあおのまも他流のりり一まのりりうすま
やうト案ホドコらう拵々ふあをのくと迎ひの催
促三勝の思ひ切く一まのりりてゆりあをと程を参
トまをヨ一さうサ拵一まコウくは内身の日蓮
さあの内直筆筆拵はまんのうまう病人の所へ

紙のどろろ貸てきりあそいでこれいふしごと金
と紙小包んで渡一見舞ふ何を買てきりや
ト残る方あき信切小身むりてきまき出けり三勝の
爺親小伴れ伯父の方一といをきりてきり伯父
の幸屋也可非野得金とゆれりは遠の流り医者
親子四人牙子坊主下女と下男まで七人ぐに富る
はいあし給ども衣食の料六正かぬ表間にまき立
流中も実お應の住居有りあふ来かると三勝と伯

父の家でい出格手かるとあも見つけ一ツやくせんご
早もくと金関へま出一ツやくとあも上んるサあ
ら一ツそのあ人うとさふ暑いト袴を取り三勝
も中の頃いり一ひまぐお目おかりませんいのも
出機嫌独去りまぐつは爺の伯父さんの庄屋
まをおむつひでいりつあやのませり殊おを来一
中上まを早く伺ひたうとまをまを来一
てまごのまをま一ツやくそのお小梅の實おりあ

若旦那も徳山まで参りたさうぞうとられ
たらと三勝が貞おの夕映や終あざやふ
見ふりり 伯母 赤面するところあまの夕人の
為のよきとあるまのトりひさう三勝の貞
とらと縁め 伯母 ホニニおれはる程の肌目ぞう
思ひ所為のせうは方の貞がうつる指ご
徳伯母さんいあくとおあざり提げます
久く私に機械嫌をうかひませんとそれ

でわりのあるまの参り参り参り参り参り
ナラくりトめおるのヨはう毎日私がつれて
徳方(行ませう) ナイありがう存トます
が今日の日がりのつりのを参り参り参り参り
まの重てぶおを頼ひ中ます ナア三當分
け方(留ておくはのりごう其糸で居る
ナエくは静あのおくとお王人さるの力も人
ぶくるであのりまもはう是れ今日帰ります



扇面と
得く
は、その
意惜と
深ま

るけれども内老年とあどくさゆまくそる恩の
父さ由内夫婦出苦勞多うも柔身のいづ
今更悔んでうくぬと不孝と知つても女の道
まのくねまきぬ薄命着も別道とあるな
け黒髪も今が若狭と六思ふの男子でた
髪とびをむむのやうたう宗貞の
此出家をあらうとて

たうち後いれそくも馬羽玉の

我ら髪をわびむあありけん
亦尊に姫君の由歌ふ
心うう千筋と極黒髪を
今ひとまかりとまらま
發明もあふ悲くさもまらる浮世のよりあせう
思ひくくしてあれるりさまふ伯母も所別るそ
心の中を汲んで知る茶のるこそ六まて入る痛
ハ程くめくとせ七のこと思ひあて包涙をそ

あまのふとろまのこの別をせめて完一度お目
かりおのどおごひをまもぐとらやくそれも久し思
ひの種モウく愚智の思ふまどと思案を定め
心底の男もあつぬ賢女ありきて十年の得玄と
相續綱の三勝と呼寄なれば三勝の伯父も向ひれ
笑とぞ一七挨拶まま伯父の得玄一コレサく
其拙ふ義理を述べにわづぬとご子も同程
お身でまもあつぬやうくい娘ふるあつてソウ

とれお早速まどは伯父がまもに頼まふあはが
亮と兼知していれまのウコヤあつてまもつ伯父
さんの御身おまひまうととあつ何なりとも背
まますまのまらるうか王のある身でまもあつら
お憑とまらる筋お依まして六爺さんの御でもそむ
まはらトまらりわられて親伯父もまらあつて
見えけらる得玄いあが笑ひして一あウま程おあ
の由おとまら外のおとまらけ方の次男の

種彦所と主婦ふあつて親父さんと隔居させ
これまのろ。エコいあの振ふお事案あれとお身で内を
公大ての由書芳るまの思ひぬらそで業中入る
まのが種彦らうの北太其方の十九似ありうらぬと
りよでもるの。エ美知あてこれまのうとりと三勝返答
あくさううらむけがぶの性急たまのうひて 十返
親とせぬう三勝親と親とあつるう婚姻ありこの
とら思ひぬらるる不孝のあつたわまつくおとく吃ら

きそとあさんなりとせし養れるまごさされと覚悟の
一心東前屋あそれぬ烈女の二途例ふありあふ服
差とぬくより早く鳩田箇の根よりふつう切
放せそのなれうちの稲妻よりなる死自在の武士
の妻女となりた死生立ちあつて人々これいとあど
ろけは三勝の切落せし鳩田をあの伯父さん
あさう差そ 上果の上うう七才もを産の親より
るを深の由恩を請と伯父さんの御ふそむくま

あの身と思ふはまゝまゝト涙みぎく小立ぬ
言執たぐりきけは世の仕長とてつりとこそ
思ひまけれ

一首と證とて人情とあり

情と思つて人も契りけれ

かろるるくひは世とてつとけれ

貞烈美談園の花初編

二の巻

貞烈美談園の花初編 三の巻

東京 狂訓亭主人補綴

第五章

烈しき所為もさよふ女なり久しなる涙ごむあむ

平七きより見見とや上とて後室さあかたうら

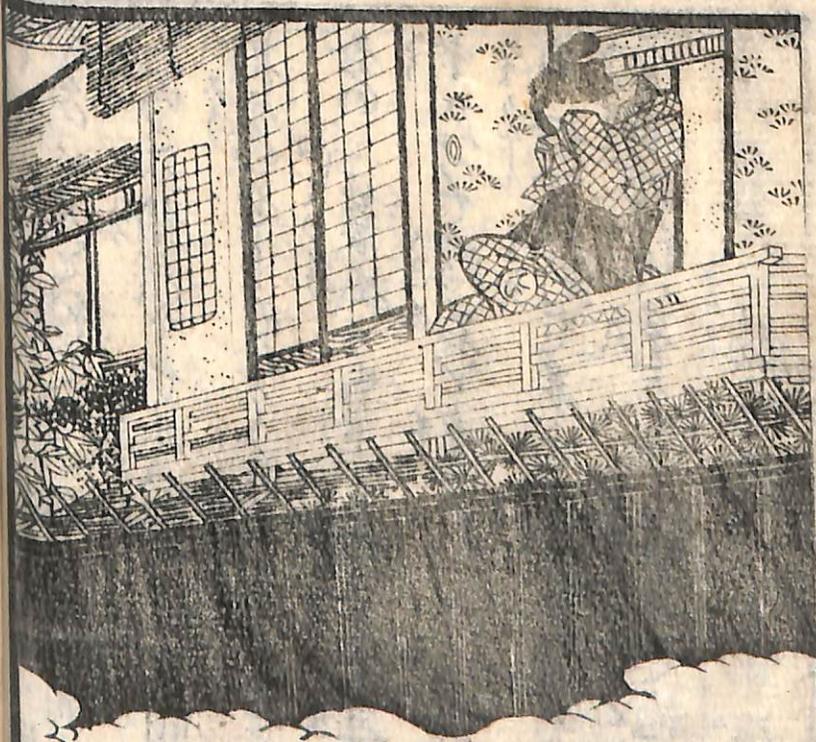
い夢遊がて殿とのかれ二人か中ハ私があはれは

夢子にさうくさあきうめて居ても恨であらう

と私をあふさきうとるさされて百兩といふ大金と

簞笥ふかたくつと捲く小袖を残らむ中程ま
で身のこも付て暮るとは作との四五日以せん
それやとよまを成おきと猶ても不孝と不孝の
罪ハ除れぬけ身のりづらうと免あされてくご
さいまゝ髪と落さも糸終らしく思入て居
まされれど貞女と立て不孝のいひ可け恩と情の
二方(おいとゆもいひさぬのがお名残情の後室
さる。おやうらうらうの半七さるモウ此世であめりも

かゝるひまをせまぬにぞよ来世か例お居ては世の
此恩を報トさ今朝も半七さるの法作あら
ぶのも今日(けふ)の事りともあるが大恩ある伯父の大
病と守てやね不便お思ふ自あふ義理とわ
せらるるもの候まゝぬれ世とあらあわらて
守とか金とあるづらう中程で伯父へ土産と持
てゆけ病人へ不実とされと今日(けふ)の事りて又ゆくと
あまやうてそれう二階(か)よりあまやうと



三勝の文
朝平
忠十郎
拾遺
と

唯今之世... 十一年... 一若... 性... 法... 一... 下...

唯今之世... 十一年... 一若... 法... 一... 下...

叔半七六三勝が伯父の見舞に於てより引つづいて
急病と成て心由をきくねと彼は是れ目と過したる
やうに其内小を聾入の吉辰と今日目を癒せし
るまゝ今あつふおとろれ事おもふれ心のたけを筆に
りける巻紙も胸を焼画の繪半切されぬ二人が申
そと神のありまをめぐりところめぐるは花形の言
をてをまる倭文字封ハ二重ふきあけてすれぬ心押
指と付て密小姉を頼む他知ぬやうよ三勝おとけ

をれて下さす十さまが親父の姉弟心置きた頼母
まき折半七と急聾耳不貫兄とする先方いつる言承と
たづねる所れたる婦三川中へ海つぎ一舟入の家あり
筑山草不才を茂り業る盤員他もくやむ一挿乳
母や腰元大世の重娘の病業を保頼のまきと物をた
まはる急の池可しとらん抱けおぼる海流を病す
くちんお徳物よのふるあの上手ごトせ先お笑ふ乳
母の物び一う久一かりてお嬢さるのお笑ひの息と見え

色がどよもりの子乳一た振でござのまをま陳小内若方
がこ座まいままま振まごまうまかま安ま雨まドまナまヨま子まかま嬢まさまい
又ツイれ新造さあとおスのを口まれままオホまとまナ二
尚か嬢さんといられる方が能まヨまそれでもあれまとま
いごでまれ新造さあおあまりまをま成まこのまをま「まま倦ま」
の久ま余まりま早まいまのま乳母ま「ナま勿ま辨ま高ま僕まままのまのま
貴君こそお否でまはま入まるま私ま共ま何までもまおま陽ま「ま振ま」
何まをまくまままのま「まエまくまそれでもま私まとま隔まてま」

あやもま禮ま振まハま大まそまうま由ま若ま方ま振ま「ま由ま田ま嫁まさまあ
のおまをま「ままま」まもまおま明ま「ままま」まのままま「ままま」
いままま「ま私ま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」
「またま振までま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」
ままをまおま「ま私ま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」
取ま振ま「ま私ま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」
いま殿ま方まにま「ま私ま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」
中までま「ま私ま」まのま「ま私ま」まのま「ま私ま」



くきる病まひの文章ぶんしょう 一ひと珠たまの奇き癖くせをあてた
ひるがう中ちゆう窓まどとさきをと明けあけ一ひとサアさあお嬢おぢやうさあより
お少おせ摺すりづけせトと操さうをうげたるあのおや筆ふでにのぼし
は紅べにゆくりとこそい知られなき

運はこばの枝えだも今いまいそはほせれ義理ぎりの
隔へだ垣かきさあ一ひと外うへ月のあき少せう別べつれり
ゆきより思おもひ極きくありひるがうあ

あきい身みのそまそま榮さか花はなのうす
本もとさゆるがれ由ゆ別べつれとさあをを知しる
少せう別べつれををあそそれををも忘わすれぬ極きくとさあ
あもくとあつとあつとより
神かみあしぬ身みのけうあさい伯父おぢのあはれ
せりまうれ何なんのあはれももあつたからぬ
そのこととあつとあつとあつとあつと
そのまじりあつとあつとあつとあつとあつと

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It consists of approximately 10 lines of text, with some characters appearing to be in a non-Latin script, possibly a form of shorthand or a specific dialect. The ink is somewhat faded and the paper shows signs of wear and discoloration.

Handwritten text in a cursive script, similar to the top page. This page also contains approximately 10 lines of text. The script is dense and flowing, with many loops and flourishes. The paper is aged and shows some staining, particularly towards the right edge. The overall appearance is that of a well-used historical manuscript.

唐は何人の心で作りし
少入の事をぬきの癖は父の癖
夫婦よりの定規と縁の申れは

ト瀆りけさるゝ各のうは乳母の涙とそと
お園も姑終老をあはせまゝ今所ふ半を
トと奥園うとあめて横よ息とそむけらる

七女は時々出例ははとあつひと返

つまげんとそあはれひあもあふ和
よふのそ人ぐあぶりのはその時
あふれをうつろり歩はれは
まおを月ひりし凍はあつ
あまといふもうちわまれ阿ま
勿辨なく君あもあひは
は身は果報の束の様の屋と
怒と情のあれを極めあはれ

かりんをありんらんらん
伊弉
伊弉の心よりあつひまわらさ中
平のあまの君の心世の心
市橋のくさもくは後宮の心
つねびの身をわたりてえん
終るよまらうとてあまの心
そんおげんごまをいま婦の中
ひらまらう百萬年も心同あま

少年よりまはるの心
かりんをありんらんらん
まらうとてあまの心

ト瀆からまらうか園の心
持てまらうか園の心
の心の中思ひやまらうか園の心
まらうか園の心



913.5

ソ

2